

かつて鶴谷八幡宮造宮で玉隠英瓊と誼を深めたように、里見義豊は、多くの文人と接し交流を深めていた。

教養を高めることに、義豊は熱心だった。一日の大半を孔子や孟子の学問に励み、また孫子と呉子の兵学所を読んで机上の戦術にも励み、そして詩歌に勤しんでいた。

身の回りに禅僧を侍らせていたのも、鎌倉の玉隠英瓊とのつながりを大切にしていたからである。

当代一流の文化人との縁故は何を犠牲にしても確保したい一心からであった。

日頃より義豊に近い大昌寺の楽山和尚は、ときおり白浜城へも足を運んで

「これで広く耳を傾ける器があれば、申し分なし」

と義通へ常々呟いた。

正直にいえば、在地豪族を軽視する義豊へ、楽山和尚は冷ややかな想いを傾けていた。

楽山だけではない。

他の多くの僧侶の気持ちも同感である。

もっともその軽視の延長にある里見家一統という義豊の志を、理解する者は安房にない。

「人というものは、隆盛なら群れるが傾くと散る。その散る人を無自覚でつなぎとめられることが器量。大殿の器量で、里見氏は持ち堪えております」

「儂は隠居じゃ。何ほどの力やある」

「殿の行く末、このままでは……」

教養だけで家を采配しようとする当主の下では、決して家臣は附いてこない。楽山は熱く説いた。

「あれは心に強く求めるものがあつてのう。誰の言葉にも耳を貸さぬ」

義通は苦笑した。

その後も楽山の愚痴は、白浜を訪れる度に口に出された。

禅僧をも危機感に苛む義豊のなさりようとは、何事であろうか。《一統》という理想と、いま置かれる現実。なまじ頭がいいだけに、義豊には

誰もが物足りなく映るのだろう。

大永元年（一五二二）八月末。

意を決した義通は、単身、ふらりと稲村城へ赴いた。

運河の改修も終わり、滝川へ設けられた船着場には、鏡ヶ浦から上がってきた六挺櫓舟が二艘係留されている。水軍基地とまではいかないが、海と直結させる考えは、義豊ならではと云つてもよい。

義通突然の来訪を取り次いだ上野筑後守助国の言葉に、義豊は戸惑った。無下に追いつ返すこともできない。

「大殿、いかが為されましたか」

慇懃な申し様に

「人払いを」

義通はそう応えた。

人払いののち、義豊は障子を開け抜けにした。

「普通は、閉めるだろう？」

「まだ閉め切るには、暑い時期です。それに聞き耳立てる者がいるかも知れません。明け透けにすれば、誰も近寄れませぬ」

義通は眉を顰めながらも、一応の理屈に得心した。

「で、今日は？」

「うむ。我が死後のことを聞いておきたくてのう」

「お戯れを」

義通は《一統》の志について訊ねた。

理想としては素晴らしい考えなれど、担がれている立場の里見家がそれを急ぐ不利を如何考えているか、じっくりと聴きたかった。

まずは大きな在地豪族である正木通綱から領地を召し上げ、新たに同じ場所を里見家からの恩賞地として授け取らすのだと、義豊は呟いた。

「この土地から里見家へ年貢を入れてもらいます。その年貢より、正木家に扶持として年貢の六割を授けます。正木家が従えは、ゆくゆくは他の在地も従いましょう」

「なぜ、正木か？」

「父上の意を汲む者ゆえにございます。それが奉行衆にも納得させるきつかけとなりましよう」

考えているものだ、義通は腕組みをした。

確かに、正木通綱ほどの者が従えば、それに倣う者もゆくゆくは現れるだろう。

「しかし、都合のいい解釈であろう」

「ゆえに父上にも、(一統)の御理解を頂きたいのです」

「そなた、なにゆえ(一統)などに、こだわることか？」

「まだ京都幕府でも成し遂げぬことだからです」

「為せぬことには、理由がある」

「その理由も、単純なことではないですか」

つまりと、義豊は言葉を継いだ。

「応仁の乱よりこの方、將軍家の意向とて定まらぬ由。古河も小弓も、坂東の足利家とて同様。

儂はこの秩序を真つ先に構築し、やがては坂東公方家にも定着させたいのです」

「……」

「そうすることで、里見家は関東管領職を凌ぐ副帥となることでしょう」

「理想としては正しいが、余人が望むか否かは別物であろう」

「成れば考えも変わります」

ふと、義通は思った。

玉隠英瓊が義豊に気を留めるのは、一統思想と関東静謐の理念が一致するからではあるまいか。現実論ではなく、宗論であり机上論、それと考えを一にする同志として受け止められたからではないか。

「人はな、まず食っていくことから始まる。世の中が静謐を望めば、流れは泰平へと向くだろう。されど、今はその儀に非ず。無理に流れを変えろことは、(一統)とは程遠い」

義通は毅然と義豊を非難した。

この(一統)の理屈は理解するが、それだけでは成り立たぬのが世の中なのだ。

「父上は里見家が安房の覇者であるべきと思わ

ぬのですか？」

「覇者とはなにか？」

「人を支配すること、出来ることです」

「傳くことだけが、覇者とは思わぬ」

義豊の考えは単純だ。明瞭ゆえ判りやすい。

それだけに、人の世では理想論そのものであり、生きていく者にとっては迷惑千万でしかない思想だと、義通は思った。

十十十

賢使君(1)

夢酔 藤山